"Irishness" through the Sport-Life of the Irich People

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okubo, Hideaki, Enomoto, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9619

スポーツライフの中の「アイリッシュネス」
—GAA(Gaelic Athletic Association)の設立（1884）過程から—

大久保英哲，榎本　雅之*

"Irishness" through the Sport-Life of the Irish People

Hideaki OKUBO，Masayuki ENOMOTO

1．研究の動機・目的及び意義

アイルランドでは，サッカーやラグビー，ゴルフなど多くの英国式のスポーツが行われ，また人々は毎週のプレミアリーグ（英国プロサッカーリーグ）や，冬に行われる6ネイションズカップなどに大きな関心を寄せている。こういったプロスポーツのほかに，アイルランドでは，「ハーリング(Hurling)」「ゲーリック・フットボール（Gaelic Football）」「カモギー（Camogie)」といった伝統スポーツが行われており，この選手たちは，プロフェッショナルではなく，全員アマチュアとしてプレーしている。毎年，9月に開催されるオール・アイルランド・チャンピオンシップス（All Ireland Championships）は国内最大のスポーツイベントであり，伝統スポーツが現在でも人々に支持され，重視されていることがわかる。

これら伝統スポーツを統括している組織がGAA（Gaelic Athletic Association）である。1884年に設立されたこの組織は，英国からの近代スポーツの流入に抵抗し，自国のスポーツを保護するために活動してきた。1971年まで，禁止条項（Ban）によりGAAのメンバーはサッカーやラグビーを行うことはおろか，観戦することも禁止されていたし，英国からの独立派やアイルランド統一派と結びつくことにより政治的な活動も行った。GAAは「アイリッシュネス」をメンバーに意識させることによって，組織の基盤を整えていた。

このGAAによって主催・統括されるスポーツ（以下GAAスポーツ）は，アイルランド国民が世代を超えて楽しむことのできるスポーツライフを可能にするシステムになっている。各教区で組織されるクラブシステムによって，子どもたちは町の代表としてプレーすることを目標とし，大人たちは町の代表としてプレーすることを誇りにしている。また，プレーすることから引退した人たちは，町の代表として戦う後輩たちをサポートし，子どもたちの指導を行う。この伝統は各地のクラブに脈々と受け継がれ，GAAスポーツが生涯にわたってスポーツを楽しむ場として機能している。したがって，地域性が強く意識され，自分の名誉，町の名誉のためにプレーすることが尊重されており，またクラブの運営はほとんど，地域の人々のボランティアによって行われている。

現在日本の平均的な人々のスポーツライフを見るとき，そこで行われているスポーツはほとんどが外来のスポーツである。その一方で，それらのスポーツの中に「日本人」としてのアイデンティティを見いだそうとしているようにも見える。また，日本が過去に生み出した柔道のようなスポーツも国際化を指向するあまり，効率的なトレーニングを行うことに関心が向けられ、スポーツを通して、自己の内面と向き合うことや、競技前後の儀式的な日本独自の要素が

平成19年10月1日受理
*金沢星稜大学

薄くなる傾向にある。このようなグローバル化と地域や国民のアイデンティティを如何に調和させるかは国民スポーツの大きな課題でもあろう。

アイルランドの国民スポーツは，隣国で宗主国であった英国に文化的に対抗する必要性から，アイルランド独自のスポーツの中に「アイリッシュネス」を求めた。アイルランドの国民スポーツである「ハーリング」を統括する組織であるGAAは，これらの問題にどう取り組んだのであろうか。本稿では国民スポーツを統括するGAAの設立過程を検討する中から，このことを明らかにしてみたい。

2．先行研究の検討

GAAは単にスポーツ組織としてだけでなく，独立運動や反英国運動などを通じて政治に強く関わってきた歴史的経緯から，ナショナリストたちの政治的組織と見なされてきた。これまでのGAAスポーツ研究の多くはそのような文脈の中で叙述されてきている。このGAAの評価は内戦やテロが沈静化している現在（2007年）においても残り，社会学や政治史的な視点からのGAAをとりまく研究が見られるものの，GAAの全体像を把握するにはいまなお十分研究がなされていないのが現状である。

このように，GAA史研究は，その政治性ゆえに敬遠されたり，逆にその政治的な象徴性ゆえに研究の対象ともされてきたのであるが，多くは通史[1,2,3]や伝記[4,5]，地方史やエピソード集[6,7]等の形でとして叙述されてきた。また，近年，特定の期間に焦点をあてた研究[8,9,10,11]などもみられる。日本でもGAAに関する研究[12,13,14]は行われているが，本格的な史料実証的研究はなされていない。

《通史・伝記・地方史やエピソード集》

GAAの代表的な通史にはPuirseal[1]とBurca[3]の著作があり，加えて現在のGAAの主要活動となっているハーリングについての通史であるKing[2]の著作がある。Puirseal[1]は，主に当時の新聞である*Freeman's Journal*や*United Ireland*の記事を用い設立期GAAについて叙述している。著者はスポーツ紙のジャーナリストであり，物語的要素の強い著作となっている。

Burca[3]は，T. F. O' Sullivan[15]の*Story of the GAA* (Dublin, 1916) に依拠しながら，新聞史料を用い設立期GAAについて述べている。Burca[3]はGAAの設立やスポーツ活動について概観しており，GAAの設立が成功し，各地でGAA主催の大会が開催されたことや，多くのクラブが加盟したことを述べている。しかしここで扱われた大会はGAAにとって重要な大会のみであり，設立期のスポーツ活動を網羅しているとは言えない。

King[2]はハーリング史を中心に概観した著作の中で，GAA設立期を「ハーリングの復活期（the revival of hurling)」と位置づけている。King[2]は1887年にハーリングやゲーリック・フットボールのオール・アイルランド・チャンピオンシップ大会の開催が決定されるまで，GAAの最優先課題は陸上競技大会をアイルランドの全ての階層の人のために開催することであったと述べている。

設立期GAAの代表的な人物史研究には，Burca[4]による研究とO Rian[5]による研究がある。前者は設立者マイケル・キューザック(Michael Cusack)について，後者は初代会長モーリス・ダヴィン(Maurice Davin)について叙述している。それぞれの研究は，当時の新聞や手紙などを用いて詳細に人物像を描いている。また，キューザックに関する史料として，*Celtic Times*を用いている。キューザックはGAA設立のためのキャンペーンを各地で展開し，組織を設立するに至る。Burca[4]はキューザックの存在がGAA設立にとって必要不可欠であったことを指摘している。O Rian[5]はダヴィンの陸上競技大会における活躍やGAAにおける役割について述べている。これら両著作から，GAA設立期のアイルランドのスポーツ界の一側面を知ることができる。し

かし，両著作とも GAA 系の出版物であり，客観的な叙述がなされているとは言い難い。

Cronin[6]は，コーク州に関連した人物や出来事59項目について，設立期から現在(2005年出版)までを先行研究により叙述した。この著作はCork市が2005年ヨーロッパ文化都市に選ばれたことを記念して出版された。Fullam[7]はこれまでの編年体で述べられてきた先行研究を，多角的に分類し，紀伝体に書き換えて紹介している。以上2冊の著作は，参考資料の出自も明確ではなく，GAAを分析することよりもその性質を紹介することに重点を置いている。両著作はよくまとめられているが，先行研究をまとめただけという限界をもつ。

《初期GAAについて》

Mandle[8, 9]はこれまでのGAA史の先行研究からGAAと庶民文化，GAA内のIRB（Irish Republican Brotherhood）組織の活動についてまとめている。庶民文化との関連については，初期GAAにおいて，組織をコントロールする立場であったナショナリストたちが，庶民文化にGAAを通してナショナリズムを浸透させていったこと，GAAスポーツを英国に対抗する象徴的なものとして形作ったこと，そして，カトリック教会を巻き込んだ1教区1クラブ制がGAAを庶民文化に浸透させるために大きな役割を果たしたことを指摘している。またGAA内でのIRBの活動について，その設立から1916年までのイースター蜂起までをGAAの中央委員会の議事録，新聞を資料とし，詳細に叙述している。

Rouse[10]は，当時の新聞を主資料として用い，GAAがどのような経緯で敵対する組織や人々に対して禁止条項(Ban)を制定し改正していったのかを詳細に叙述している。これにより，設立後すぐに制定された禁止条項の持つ意味は，GAAがアイルランドの陸上競技界で重要な地位を確立するためのもので，以後改正されていくものに比べて政治的意図は薄かったことを明らかにしている。また，GAAの禁止条項について，その役割がGAAの行うスポーツ活動以上にナショナリズムにとって重要であったことを指摘している。

石井[11]は，前述したMandle[8,9]，Rouse[10]の研究を整理し，禁止条項を通してGAAとアイルランドナショナリズムの関連を指摘している。しかし，石井の「アイルランド人にとってはイギリス・スポーツそのものが容易に受け入れることのできない政治的意味を表象していたのかもしれない。」[17]という指摘は，あくまでも運営上の規則，禁止条項から見たものであり，アイルランドの社会背景や禁止条項の浸透状況などの実態をふまえたものではない。これらのことを検討すれば，異なる指摘を行うことができよう。

以上の研究の主要な焦点はナショナリズムとGAAの関係であり，GAAがナショナリズムと密接に結びついていたことや，両者が相互に作用しながら成長していった過程を知ることができる。また，設立期GAAの執行部を支えていた人々の中に，IRBの活動メンバーが多数含まれていたことも明らかにされている。しかしながら，GAAの中央委員会の活動が中心に述べられ，彼らが実際のスポーツ場面においてどのような役割を担っていたのか，或いは，IRB以外の一般的なGAAのメンバーがどういった人々であったのかということには触れられていない。

《日本のGAA研究》

海老島[14]，大沼[15]，坂[16]は，社会学的な視点からアイルランドにおけるナショナリズムとスポーツの関係について調査している。海老島[14]は，先行研究を参考にしながら，設立から1900年代初頭にかけての地方GAAクラブについて概観することで，GAAが教会やNational Leagueと密接に結びついており，地方に住む人々が，はじめは教区の中の一個人から，より大きな社会集団に組みこまれていったことを指摘している。しかし，これは社会構造学の視点から地方

クラブを叙述したため，その実態や地方の人々の様子は明らかにされていない。大沼[15]はSugdenら[18]の先行研究から，アイルランドで行われているGAAスポーツ・ラグビー・サッカーについて分類し，アイルランドにおけるGAAの位置づけの検討を試み，現在のアイルランドのスポーツ界が3分割されているのは，19世紀後半から続くスポーツと政治との密接なつながりによるものであると指摘している。坂[16]は，海老島[14]の先行研究をもとに，キューザックが近代的身体の育成を目指しており，その性質はIRBの軍事訓練の要求を満たすものであったことを指摘している。大沼[15]，坂[16]の研究は設立期GAAの先行研究をまとめたものであり，これらの研究の関心がスポーツと政治性の関連に向けられ，スポーツ活動に関する史料実証的な研究とは言い難い。

以上，先行研究を概観すると次のことが指摘できる。

これまでGAA研究は政治との関連の中で述べられており，特に設立期GAAの分析は，GAAとナショナリストの蜜月のルーツを解明するための試みであったといえよう。また，同様にGAAの禁止条項を分析することで，GAAがスポーツ組織としては極めて特殊な性質を持っていることを明らかにしている。しかし，いずれの先行研究も，GAAの執行部について焦点を当てており，スポーツの開催現場でのナショナリストたちの活動には全く触れられていないのが現状である。

3．19世紀中頃までに行なわれたハーリング

まず，Padraig Puirsealの*THE GAA in ITS TIME*[19]をもとに19世紀中頃までに行われたハーリングについて述べる。

ハーリングはバイキングの侵略の時代にもゲール人に好んで行われていた。その後ハーリングは土着のアイルランド人だけでなく，アングロ＝ノルマンの侵略者たちにも人気を博した。その熱中ぶりは1336年のキルケニー法（Statutes of Kilkenny）からも見て取れる。

> 人々は国境の争いで地面の上で大きなクラブでボールを打つハーリングという名のゲームを用いてはならない。（中略）弓をひいたり，槍を投げたり，腕を使うほかの上品なゲームをすることによって，アイルランドの外敵から容易に身を守ることが可能になるかもしれない。

街の囲いの中に住む人々はハーリングをし続けると，監禁されたり罰金を科せられたりした。しかしそれでも，この土着のゲームから人々を引き離すことはできなかった。ハーリングは1537年のゴールウェイ制定法（Galway Statutes）によって再び禁止される。植民者の間でとても人気のあったこのスポーツは，自然な流れでアイルランドからイングランドに紹介された。

1667年のジョン・ダントン（John Dunton）は彼がアイルランドで見たゲームについて手紙に詳細に記している。

> アイルランド人は牛の背から毛を引っこ抜き，彼らの手で，それをとても硬い大きなボールにする。このボールを彼らはハーリングで使う。ハーリングとは，柄が3.5フィートほどのカモーンと呼ばれるスティックでボール打つゲームである。そのスティックの下の部分は，曲げられていておよそ3インチほどの広さがあり，この広い部分の上で，ボールを運んだり，相手側の選手を飛び越えて，40または50ヤードの距離をとばす。負けそうになると，ボールを思い切り打ち，ゴールに向かって飛ばす。

> このスポーツは時々，教区や男爵領で対抗試合が開かれた。それらは1チーム10人，12人，あるいは20人の選手を選び，褒美は1または2バレルのエールだった。それはフィールドの中に運ばれ，勝利者はそこで酒を飲むのだった。

> このゲームは普通，とても広い平原で行われる。葉

のない草がよりよい。そしてそれぞれのゴールは200から300ヤード離れており，ボールが相手側のゴールを越えた方がその日の勝者だった。（中略）これらの大会では，2千人の人を集めることもあった。

18世紀に入り，男爵領のハーリングが盛んになった。その様子をモーガン公爵夫人（Lady Morgan）は，以下のように記述している。

それぞれの州では，時々男爵領同士でハーリングの試合を行います。それぞれの集団は軍隊のように整列し，自分たちの色によってお互いを見分けます。それぞれのゴールは，だいたい200ヤードほど離れた距離にあって，そのゴールはアイルランド語でcoolbaireと呼ばれる2人の歩哨によって守られます。（中略）ゲームの中で，その言葉，魂，機敏さが表現され，それは本当にすばらしいものです。

また，同時代の他の記述では，

ハーリングまたはゴールは，アイルランドで好まれているゲームである。（中略）それはスコットランドのゴールのゲームによく似ている。しかし，ボールはずっと大きく，普通直径が4インチくらいある。その道具もまたより大きく底は角ばっておらず丸い。ゴールを行う人（goalers）の数は20人や，100人あるいはそれ以上のこともある。それはふつう広い野原で行われ，人数と機敏さにおいて同じくらいの力量の二つの集団で行われる。それぞれで決められた相手側の生垣の上をボールが越えることを目的として行われる。その生垣は試合開始前に決める。

これらのゲームは普通，日曜の礼拝の後行われた。また，生垣の代わりにその土地の目印となるものを使ったりもした。その目標物は道であったり，木であったりして，様々な場所で行われた。モーガン公爵夫人の記述には相手との区別を行うためにユニフォームの着用を推測させる記述があるが，それが服装であったのか，帽子などの小物であったのか詳しくはわからない。

そして18世紀の中頃，男爵領でのハーリングは最も盛んに行われ，多くの観衆を集めた。試合は，貴族や大地主の間で組織され，彼らの使用人や借地人たちがゲームを行った。また，時折そういった個人間の対戦でなく，もっと広い範囲で，つまり州や地方をベースとしての試合も行われた。そして賭けが盛んに行われ，トラブルも相次いだ。この頃になると，これらのゲームは平日に行われていた。また，上流階級の人々もハーリングを行なっていた。フィンズ・レンスター・ジャーナル（Finn’s Leinster Journal）によると，1768年にティペラリー（Tipperary），キルケニー（Kilkenny），クイーン（Queen）州の貴族たちの間でハーリングコンテストが行われたという記録がある。

アイルランドの南部や西部は，ハーリングの拠点だった。それらの地域では，いたるところでそのゲームが行われていた。以前から行われていた地域は，現在でもハーリングが盛んで，アイルランドの他の地域に比べてハイレベルなプレーをする。

C. S. ホール夫妻（Mr. and Mrs. C. S. Hall）は1830年代ケリー（Kerry）で行われたアイルランドの小作農の素晴らしいゲーム，ハーリングについての詳細な記述を残している。

それぞれのチームから選ばれ編成された50人か60人の選手は，たいてい裸足で，向かい合った二つの列を作り，彼らはハールを交差させて，ボールが投げ上げられるのを待つ。（中略）それぞれのゴールには二人のゴールを守る人がいる。

ボールを投げるために選ばれた人は，できる限りまっすぐ上に投げる。その間集団はハールを引き下げている。ボールが上がると彼らはハールを持ち上げ，その降下のときにボールを打つ。今戦争に似た衝突が始まる。ハールのぶつかりあう音がガチャガチャと聞こえる。ボールは繰り返し打たれる。たび

たびゴール前での攻防が行われるが，だれかが十分なクリアをする。そしてボールはフィールドを越えて飛んでいく。

優れたハーリングの選手には，素早い目と迅速な手，力強い腕が必要だ。その人は，よいランナーで，巧みなレスラーでその上，忍耐強く毅然としていなければならない。

1840 年代に入り，大飢饉が起こる。その頃ハーリングが行われていたかどうかをこの文献から読み取ることはできないが，この大飢饉で農民たちは，その日を生きるために，農具を売って食料を得た。生活のために必要な農具を売るほどであるから，ハーリングの道具も売り払われたりしたのかもしれない。

4．上流階級に限られたアイルランドのスポーツ界

次に，Padraig Puirseal の *THE GAA in ITS TIME* [20] をもとにアイルランドのスポーツ界について述べる。

《競技大会》

19 世紀中頃に，オックスフォードやケンブリッジで始まった組織的な競技大会やスポーツ大会がアイルランドにも伝わる。こういった「大学競走大会（College Races）」は 1857 年に，ダブリンのトリニティカレッジで発足する。この大会はトリニティの人々のためのものであり，またすぐにこの大会は威信と人気のある大会となる。

イングランドでは最初のアマチュアアスレチックチャンピオンシップ（Amateur Athletic Championships）が 1866 年に開かれた。ダブリンでは翌年のフィーニアンの蜂起の年(1867)に，最初のクラブスポーツ大会が開かれた。それはシビル・サービス・アスレチッククラブ（Civil Service Athletic Club）によって組織され，それは大学競走大会のように，競技者の制限があり，上流階級の人々のためのスポーツ大会となった。すぐ後のクイーンズカレッジによって開かれた大会も同様に上流階級の人々のみに制限された。

田舎の体のがっしりした日雇い労働者などは，そのように集まって競い合う場所がなかった。ダブリンの労働者や貧しい商人は，カレッジパークや役人たちが使うレンスター・クリケットグラウンドに入れなかった。しかし 19 世紀後半，そうした社会集団の余暇時間が増加するとともに，スポーツへの興味も増加していた。しかし，ジェントルマンのアスリートだけが，厳しいアマチュアリズムの規定を満たす唯一の集団であり，カレッジパークやクリケットグラウンドで競うことが認められた。

このアマチュア規定とは次のとおりである。

アマチュア規定－オープンの大会に参加してはならない。公的であれ，私的であれ賭けが行われる競技に参加してはならない。人生の中で生計の手段として，競技大会の運動を教えたり手伝ったりすることを仕事にしてはならない。修理工，職人，労働者であってはならない。

このアマチュア規定により，ほとんどの人々が競技会に参加することができなかったが，このことがかえってアイルランド人の競技会への興味をおおいに刺激したという点で成功したのだと Puirseal は皮肉を込めて述べている。このようなスポーツ大会は 60 年代の後半まで多くの地方で開催された。

70 年代前半までに競争的なアスリートの要求を満たすいくつかの組織が，ダブリンや地方に出現する。1872 年のアイルランドチャンピオンアスレチッククラブ(Irish Champion Athletic Club)の成立は，人々の強い要求によるものだった。多くの点でこのクラブは上流階級の人たちのための以前と同じような差別を行った。このクラブは，‘委員会によって承認された’全てのアマチュア競技会のためのチャンピオンシップを組織した。毎年 5 シリングの会費をメンバーは課せられ，その最初のチャンピオンシップは

1873年の夏，カレッジパークで開かれた。この大会は競技会に‘アイルランド（Irish）’という名称がつけられた最初のものだった。

その時までに競技会は富裕層の間で，とても人気のあるものになっていた。そして彼らは，承認されているアスレチッククラブに回状をまわし，アイルランドナショナルアスレチック委員会（Irish National Athletic Committee）の設立を提唱した。ヴァレンタイン・ダンバー（Valentine Dunbar）は，有名なスポーツの審判でハンディキャップを調整する人物であった。彼はアイルランドで唯一のスポーツ紙であるアイリッシュ・スポーツマン紙（Irish Sportsman）の共同経営者であり，スポーツライターでもあった。彼はアイルランドナショナル狩猟・障害物競馬委員会（Irish National Steeplechase Committee）の形式でアスレチック委員会を設立することを提唱した。そして，全てのアスレチッククラブに「アイルランドで競技会を統括するための，ルールの起草や委員の選出のための会議」に代表者を派遣するよう依頼した。

この動きは多くの関心を集め，新聞紙上で回状についての議論が行われた。ポイントとなったのは，スポーツに労働者を参加させるか否かということと，「賭けランナー」として知られるダブリンのアスリートたちの処遇であった。こういった議論の後，新しい組織のために起草されたルールはアイリッシュ・スポーツマン紙に掲載された。規則の一つとして，競技者はジャージでニッカーボーカーズをはくか，上はジャージでひざで切ったズボンを着用する大学生のような服装をしなければならなかった。緩和されたアマチュア規定は次のとおりである。

> 陸軍，海軍，民兵の士官，官僚，承認された競技会，クリケット，漕艇，ヨット，フットボール，ハーレー，ラクロスクラブのメンバー，ダブリン，クイーンズ，オックスフォード，ケンブリッジ，ロンドン大学の一員そして法律や医療の専門家は，金銭のために競技してはならない。入場料をとる競技に参加してはならない。賞のために競技するプロフェッショナルと競技してはならない。この条件に抵触する人は，自分が参加するに足る社会的地位があるという申し分のない推薦状を大会の本部に提出し，禁止されていること（金銭のために競技してはならない。入場料をとる競技に参加してはならない。賞のために競技するプロフェッショナルと競技してはならない。）をしていないということを証明しなければならない。

毎年のチャンピオンシップは，アイルランドチャンピオンアスレチッククラブの庇護の下で開かれ続けた。しかし，その地位は不確かなものとなり，次第に中心的な支配力を失っていく。この頃の様子を見て，アイルランドチャンピオンアスレチッククラブのメンバーであったマイケル・キューザックは，ハーリングや重量投げが行われていないアイルランドの状況に，荒廃と物寂しい雰囲気を感じると述べている。当時台頭してきた中産階級は，カトリックのアイルランド人だった。彼らは余暇時間の使い道をスポーツに求めたが，そのスポーツは英国産のものばかりだった。彼らはまだ地方のアイルランドに残る伝統的なスポーツの復活を望むようになっていく。

1880年に英国アマチュアアスレチック協会（Amateur Athletic Association; AAA）はイングランドでスポーツ大会の運営を統合するために設立された。しかし，これに対応する動きはアイルランドでは見られなかった。

1881年のチャンピオンシップの後アスリートたちは話し合い，アイルランドにアマチュアアスレチック協会を設立することを決意する。協会設立のための委員会は招集されたが，この計画は実行されず失敗に終わる。1883年頃は，AAAに定められた従来どおりの規則で競技会は開かれていた。職人，修理工，労働者は参加できず，金銭のために競技する競技者は除外されていた。

ダブリンを中心とする組織的な競技会は英国

のアマチュアリズムの規制の下，中産階級以上の階級の人々によって行われていた。しかし，この頃は中産階級の台頭で，彼らはカトリック系のアイルランド人や，アイルランド人と混血した古い英国人であった。彼らの中には地方からダブリンで成功し，富をつかんだものも数多くいた。アイルランドの地方都市では，伝統的なスポーツが好んで行われており，地方出身者はダブリンに住んでいても少なからず伝統スポーツを行っていたと考えられる。さらに，この頃アイルランドナショナリズムの高揚が，英国産のスポーツからアイルランドのスポーツへの転換を促したとみることもできよう。

《ハーリング》

19 世紀中頃，アイルランド最大の大飢饉があった。このとき多くの人が死に，またアメリカを始め海外への移住を行った。多くの教区でたくさんのハーリングの選手や伝統的なゲームは消え去った。しかし，ハーリングはアイルランド人たちに深く根をおろしており，絶望的な大飢饉後再びそのゲームはよみがえった。1850 年代の初めにはゴールウェイ州（County Galway）でカモーン（caman）のぶつかりあう音が聞こえた。1854 年には，大飢饉後初めての大きな試合が西部で行われたという記述がある。その試合はアスローン（Athlone）で行われ，ゴート（Gort）とオファリー（Offaly）がそれぞれ 21 人のメンバーで戦った。ゴールウェイ（Galway）ではパット・ラーキン(Pat Larkin)が作成したハーリングのルールが印刷されていた。これは現在のルールとはかなり異なる。また，当時，ダブリントリニティカレッジなどで行われていたハーレー（Hurley）のルールも現在のルールとは異なる。

これらのルールは，土地独自のルールで行われていたハーリングが廃れていった 1860 年代，トリニティカレッジで大幅に改造されて形になったものである。1860 年代初期に設立されたダブリン大学ハーリングクラブ（Dublin University Hurling Club）で行われていたルールは，どちらかといえば田舎の‘Hurling to goals’の変形だった。なぜならカレッジパークでのゲームは，場所が制限されていたし，イングランドのパブリックスクール（長いあいだ成文化されていないホッケーが人気だった）から学生が流入することによってハーリングは洗練されたものになったからである。トリニティカレッジのルールでは，相手選手が打ったボールをつかんだ時だけ，パックが空中にあることを認められた。スティックを頭の上で振り回したり，相手のハール（スティック）を奪うことは「危険」とされていた。しかし，もっとも大きなトリニティルールの特徴は，刃の部分を 2 インチの大きさに制限したことだった。この取り決めはハーリングに固有の特徴をもたらした。なぜならその広い刃は，頭上のプレーや，長いパス，ボールを刃の部分に乗せてホップさせながら，あるいはバランスをとりながらのソロ・ラン（solo run）を生み出したからである。

古い形を残すハーリングはアイルランド南部，特にコーク（Cork）州の北部やリムリック州（County Limerick）で盛んに行われていた。そこではハーリングは *Scubeen* と呼ばれていた。ハーレーは現在使われている道具と同じものを使っていたが，ボールの大きさは少なくとも現在の 2 倍以上あった。ボールはコルクを芯にしてそのまわりを綿でまき，その上を革で覆ったものだった。それはシリター(*sliothar*)と呼ばれた。

ゴールウェイやキルケニーをはじめ付近の州でもハーリングが行われていたが，別の呼び方だった。ハーリングはウォルシュ山脈からスアー（Suir）にかけての町々で行われていた。1870 年代に入ると 1798 年の青年アイルランド党の蜂起以来，集団の活動の警戒が厳しくなった地域でも，またその他の地域でも定期的にハーリングが行われていた。この頃のハーリングには統一されたルールは見ることができない。

1879 年までにダブリンには 6 つ以上のハーリ

ングのクラブが作られる。しかし，それらは見かけも背景も国民的でなかった。その年の1月には，トリニティカレッジで，アイルランドハーレー連合（Irish Hurley Union）が設立される。その目的は，「自国の壮大で男らしいハーレーの技術を育成しよう」というものであった。しかし，皮肉にもこの新しい組織が最初に行ったことは，イングランドのホッケークラブのルールを真似ることだった。これによってトリニティカレッジのハーリングはホッケーとなった。

残念ながら現在手元にある文献では，具体的にどういった人がどの地方でハーリングを行ったのかといったことなどを詳しく見ることができない。しかし，トリニティカレッジでハーレーがホッケーのコピーに変化してしまうことから，アイルランドでも他の英国の植民地同様，学校が出発点となり，英国産のスポーツが伝播したことがわかる。それではなぜこういったスポーツは一般に広まらなかったのか。ハーレーからホッケーに変形するように，地方のハーリングからホッケーに似たものに変形することも可能だったはずである。GAAが設立された後に定められる統一ルールは，「新しいスポーツ」であるにも関わらず，結果的にアイルランド人に受け入れられた。

5．GAA設立のためのキューザックの活動

本項では，Marcus de Burca の *THE GAA A History*[21] と *Michael Cusack and the GAA*[22] をもとに GAA 設立のためのキューザックの活動について述べる。

GAA の設立を理解する上でその設立に中心的な役割を果たしたマイケル・キューザックの活動を知っておかなければならない。彼なしでは1880年代にはGAAの設立はなかったとも言われている。

1847 年，キューザックはクレア州（County Clare）のバレン（Burren）から遠く離れた田舎の小さな家に生まれた。両親はアイルランド語の話し手で，その影響があったと思われるが，やがて彼は愛国主義的な教師となる。アイルランド各地で教鞭をとった後，1874年にダブリンの近くのブラックロックカレッジ（Blackrock College）の教授となる。3 年後に彼はダブリンの中心地付近に自分の公務員予備校（Civil Service Academy，のちにキューザック・アカデミーと呼ばれた）を設立した。これから数年後が彼の最盛期ともいうべき時期になった。彼はその時代の高給取りの一人で，年収は1500ポンドであったと考えられている。

彼は威圧的で時に人に対して言い過ぎてしまうことのあるような人物であった。それでも，彼はダブリンに長くいることがなかったので，ナショナリストとユニオニスト両方を含む知人を形成していた。その人たちの中には大学の教授，議員，ジャーナリスト，労働者まで様々な職の人がいた。彼は時々，急進的なナショナリストの印象をもたれたりもしたが，政治思想は一般のアイルランドの人と同じように自治法の支持者だった。彼は政治的なことよりもむしろアイルランドの文化的なことに自分の人生の生きがいを感じていた。彼はその一歩としてアイルランドの言語復活運動に身を置くことになる。

キューザックは自身のアカデミーで，余った時間，徹底的に運動を奨励した。彼自身もアスリートであり，ハーリング，フットボール，ハンドボール，クリケット，漕艇をする人物だった。彼はダブリンに来て何年間かは競技会に出て選手として活躍していた。しかしその後，彼は自分の学校の設立や，アイルランド語運動などで選手としての時間がとれなくなっていた。それでも彼は，審判員として定期的に競技会に足を運んでいた。彼はICAC（アイルランドチャンピオンアスレチッククラブ）の評議員になる誘いも受けていて，1878年頃にはダブリンのスポーツ場では著名な尊敬される人物になっていた。当時，競技会は少数の裕福な人々のためのものであった。自治法の支持者であるキューザックだが，彼は競技会のためなら自分の政治的な見解を修正し，自分の有利な職業を放棄し，

残りの人生が不安定になっていいとさえ考えていた。それほどまでに彼は競技会に情熱を注いでいた。

そんなキューザックも1879年の終わりごろには，競技会に幻滅の念を抱くようになる。競技会には道徳的規範がなくなり，悪習がはびこっていた。そこでは，賞金は普通にアマチュア選手に渡されていたし，賭け事は大目にみられていた。ハンディキャップは人気のあるアスリートを助けていた。こういったことは競技会に参加する若者たちを落胆させていた。

キューザックは，道徳的規範の欠如とプロフェッショナリズムの台頭に不安を感じるようになっていた。そしてそれに対抗するための手段として，彼が純粋な競技会（pure athletics）と名づけた，スポーツの復活運動を展開し始めた。彼は競技会に重量投げと跳躍種目をプログラムに戻すことを強く主張した。この最初のキューザックの競技会についてのキャンペーンは，GAA設立を徐々に導いていくことになる。

1879年の競技会でキューザックはパット・ネイリー（Pat Nally）と出会う。ネイリーは政治とスポーツは分離できないと考える人物だった。彼は地主の代わりにナショナリストたちによって競技会が組織されるべきだと考えていた。キューザックはネイリーとの接触を通じて，自分たちの民族の肉体的な強さを守ろうと考えるようになる。そして彼は1880年にナショナルアスレチック大会（National Athletic Meeting）を開催した。そこには今まで競技会に参加することのできなかった職人たちも参加した。

1881年にキューザックはアイリッシュ・スポーツマン紙（Irish Sportsman）に匿名で三つの記事を寄せた。最初の記事は，アスレチックスピリッツと呼ばれるものが衰退していくことの懸念。二つ目の記事は，アイルランドでは政治的な見解の違いは大きな意味を持つものだったが，スポーツでは統一が可能であることを指摘した。三つ目の記事では，アイルランドの競技会で彼が悪いと感じていることを書き，それがどう改善されるべきかを述べた。

1882年のキューザックの活動は素晴らしいものだった。一つはアイルランド語に関する活動で大きな成功を得た。彼が出納役を努めるアイルランド語保護・養成のためのゲール同盟（Gaelic Union for the Preservation and Cultivation of the Irish Language）の後援により，9月に2ヶ国語併記のゲーリック・ジャーナル誌（*Gaelic Journal*）を出版した。これは当時最も近代的な雑誌で，言語復活運動の現実的な始まりだった。もう一つは，12月にDHC（Dublin Hurling Club：ダブリンハーリングクラブ）を設立したことである。そこが運営する競技会は職人の参加も認められ，アイルランドで最初のプロ・アマ関係なしのオープンな大会となった。このDHCはMets（Metropolitan Hurling Club：メトロポリタンハーリングクラブ）の元となり，1884年に設立されるGAAの基礎的な組織となる。

キューザックがアイルランド競技会のことからなぜハーリングにも興味が向けられたのかというと，アイルランドのこの国民的ゲームは50年以上の間ダブリンでは見られなくなっていた。ダブリンでは主にプロテスタント系のカレッジやラグビークラブでハーリングによく似たハーレー（hurley）が行われていた。トリニティカレッジのハーレークラブ（University Hurley Club）では，1870年に早くもルールが作られていた。そして1881年にはハーレーの統括組織ダブリンハーレー連盟（Dublin Hurley Union）が設立され，1882年の初めにはアイルランドハーレー連盟（Irish Hurley Union）が設立された。しかしこのハーレーはアイルランドの古いゲームというよりもむしろ英国で一般的なホッケーによく似たものだった。キューザックはこういった状況を好ましく思っておらず，自分が子どもの頃親しんだ国民的ゲームであるハーリングを復活させようと決意する。まずキューザックは有名なハーレーの選手にハーリングの復活に協力してもらうことにした。また，DHCの設立会議にはナショナリストとユニオニストの両

方が出席した。キューザックを含む DHC の委員会はハーレーからハーリングへの転換を準備し始めた。

数週間後，ダブリンにはハールやボールの使い方を知っている人が誰もいなかったので，DHC のメンバーは，土曜の午後フェニックスパークでハーリングの練習を始めた。しかしこの思惑は成功しなかった。1883 年の春，何人かの有名なハーレーの選手がこのゲームに協力したが，ほとんどの選手はこのゲームは自分たちの行っているゲーム（ハーレー）をなくそうとするものだと感じ，このゲームを行うことに反対した。また前年，フェニックスパークで英国のアイルランド担当大臣らが暗殺されたことによる政治的な緊張から，ユニオニストたちは非協力的であった。そして 1883 年の夏に DHC は活動を停止する。

この頃，キューザックは一般の人々のための競技会の組織とハーリングの復活を結びつけることを考えるようになる。彼はマンスターを中心に競技会を訪れ，競技会の自治とハーリングの復活の新しい計画を論じた。そしてキューザックは自治法を支持する雑誌である週刊のシャムロック誌（*Shamrock*）に，自身が教育面のコラムの編集者としての地位を利用して，若いリーダーたちにハーリングの復活と競技会への参加を呼びかけた。

1883 年 9 月下旬，キューザックはフェニックスパークのポログラウンドで再びハーリングの練習を開始した。最初の土曜日にそこで練習をしたのは彼と彼の 4 人の生徒だった。しかし，土曜の練習を見ていた人が参加し，毎週その集団は大きくなっていった。この練習にはハーレーの選手は誰も参加しなかった。けれども，ハーリングが残っていた地域からダブリンにやってきたハーリング経験者が加わっていった。そしてすぐに二つのチームができるほどの人が集まった。10 月に彼はキューザックアカデミーハーリングクラブ（Cusack's Academy Hurling Club）を設立し，12 月には Mets が設立される。Mets の立ち上げはキューザックに全国的な規模で自身の活動を成功させる自信を持たせた。そして彼の興味はダブリン以外の地方に向けられ，各地を統括する組織の必要性を感じるようになった。

ゴールウェイ州の南部ではハーリングが広く行われていて，1884 年の初頭，そこから Mets に試合の招待状が届いた。イースターの月曜にバリナスロー（Ballinasloe）で行われ，勝者には二人の地方実業家によりシルバーカップが手渡されることになっていた。しかしこのイベントは量的な面でのみ成功を収めた。というのは，ゲームが始まってすぐに集まった多くの観衆がなだれ込み，ゲームは一時中断し，Mets がゴールを決めてすぐに試合は終了となった。この試合会場から少しはなれたところで，様々な地方から観戦のため集まった人々がハーリングを行っていた。しかし，彼らのハーリングはルールがバラバラだった。それを見たキューザックは統一したルールの必要性を感じた。

1884 年の夏にはマンスターを中心とした地域の競技大会に自分の考えを支持してくれる人を探しに訪れた。その地域の競技会はアイルランドスポーツを統治している AAA のアスリートのエントリーのみを受け入れていた。彼はそれを見て今こそ計画していた組織が必要だと感じ，今まで以上に強く支持を要請した。彼は様々な場所で自分を支持する人が増えつつあることに励まされた。特にゴールウェイ州の南部や，コーク州の北部のハーリングが残っている地域に，キューザックの考えを支持する人が多かった。

この夏の初めにはキューザックは，ナショナリスト向けの新聞に話を持ちかけ，支持を得ていた。そのことにより多くの人に自分たちの活動を知ってもらうことになった。彼が支持をとりつけるのに成功したのは，最も広く読まれていた，ウィリアム・オブライエン（William O' Brien）下院議員が編集する自治法の機関紙ユナイテッドアイルランド紙（United Ireland）とリ

チャード・ピゴット（Richard Pigott）が編集する過激なアイリッシュマン紙（Irishman）だった。その結果，数ヶ月の間キューザックは匿名で自分の言い分を主張することができた。

1884年の8月のキューザックの活動は不明瞭なものだが，ゴールウェイのローア(Loughre)で会議を行い，8月15日にクロンフォート（Clonfert）のダガン（Duggan）司教に会い，後援を頼んでいる。キューザックは自分の計画には聖職者の支持が必要だということをおそらく認識していた。司教は若い頃ハーリングの選手で有名なアスリートだった。彼はキューザックの計画をサポートしたかったが，71歳と高齢で病気を繰り返していた。そこで彼はターリス（Thurles）のクローク大司教に話を持っていくよう助言した。

また，この頃にGAAの最初の会長となるモーリス・ダヴィン（Maurice Davin）との接触がある。キューザックからダヴィンへの手紙にはそのときの計画の進行状況やこれからの活動にどういったものが必要なのかが記されている。

The Gaelic Union,
4 Gardiner's Place,
Dublin.
26th August, 1884

親愛なるダヴィン

その規則などと共にアイルランド人の協会を年末までに形成しなければならない。協会は1885年のうちに全国的に組織できることだろう。我々は1886年には必ず計画的大集会を開くことができるだろう。この事業はマンスターから働きかけていかなければならない。

もしも我々が11月1日にティペラリーの中心地で代表者会議が開催されたとしたら次に？ダブリンのことは心配要らない。あそこは今以上に悪くなることはない。我々は地方の人々に目をむけなければならないだろう。ダブリンはイングランドに同意し，その関係を続けるに違いない。

私はこの日，あなたからとても温かい返事をいただいたことを，コークの人たちに手紙で伝えた。きっとリストーウェル(Listowel)のスタック氏(Mr. Stack)は，ケリーの北部の世話をするでしょう。私はナショナルリーグのメンバーではないが，私はその組織の指導者たちの影響なしには考えられない。国内の報道は，私が準備をしているとき，私に論を述べる余地を与えてくれるだろう。シャムロックは私の思い通りになる。私は1ヶ月くらいの間にここを拡大して，本格的に民衆の教育に力を入れようと思う。ユナイテッドアイルランド紙の競技会の記事は砲弾のように敵の階級を爆破している。もちろん私がしたことを彼らは知っている。したがってその新聞は手間取りそうにない。

人々のリーダーたちの支えなくしては，この国民的娯楽の復活は完全に望みを絶たれるのは明らかであるから，私はこれを拒否するのはもってのほかであるという主張をし続けることをためらわない。努力を長く続けることによってやっと我々は勝利を得た。これから我々の行う仕事は共にアイルランド人のために働くことと，その国民に非国民的な影響を与える人々を押しのけることである。

この仕事が少しでも前進したときはあなたに再び手紙で知らせます。

大いなる感謝をこめて
敬具
マイケル・キューザック

この手紙は，ダブリンよりも地方を重視していることやナショナルリーグからの支持が必要であるとキューザックが感じていることを示している。手紙の中に登場するスタック氏とは，ケリーのフィーニアンの主要人物であり，後のケリーのフットボーラーであり，シンフェイン(アイルランド独立を主張する政党）のリーダーであるオースティン・スタック（Austin Stack）の父親である。

なぜダヴィンがこの計画に必要だったかというと，少なくともダヴィンはキューザックにはない二つの要素を持っていた。ダヴィンのアスリートとしての実績は申し分のないものだった。そして彼は多くのアイルランド人に尊敬されて

いた。さらに彼はナショナリストであったけれども，キューザックよりもユニオニストに受けが良かった。ダヴィンはキューザックと全く同じ理想をもっていたわけではないが，アイルランドのフットボールの復活を強く望んでいた。ダヴィンの協力を得るようになってから，キューザックのナショナルゲームを復活させる活動の中にフットボールが加わった。

9月の間，キューザックの公式の活動はない。しかし彼はダブリンで怠けていたわけではなく，土曜の Mets の集まりを行っていた。そしてそれはその年の終わりまで続いた。また，このクラブは新しい協会に最初に加わるクラブとなった。彼のダブリンでハーリングを広める活動は 10 月にダブリンで 3 番目のクラブ，ダブリン労働者ハーリングクラブ (Dublin Workman' s Hurling Club) が設立されたことからわかる。またこの期間に彼の最も親しい Mets の委員たちと新しい組織の戦略や見通しなどが話し合われたと考えられている。

10 月 11 日に二つのナショナリストの新聞に，「アイルランド競技会世界（A World on Irish Athletics)」という同じ見出しの記事を載せた。キューザックの書いたその記事には，「競技会が大衆の手によって運営される時代が到来した」と述べられている。また，同日シャムロック誌には「我々は我々の国民的娯楽の保護と養成のための団体の設立を提案する」という記事を掲載した。

そして 10 月の最後の週に，キューザックは 11 月 1 日にターリスで会議が開かれることを発表した。ダヴィンとキューザックの署名のあるこの回状は 10 月 27 日ダブリンの Gardiner's Place の 4 番地から発された。

拝啓

我々の国民的娯楽を保護し養成するように，そしてアイルランド人の余暇時間に合理的な娯楽を提供するようにゲール人協会（Gaelic Association）を構成するにいたって，11 月 1 日にターリスで行われる会議に出席するよう心からお願い申し上げます。この会議で発足しようとしている運動は，マイケル・ダヴィット氏，ジャスティン・マッカーシー下院議員（Justin McCarthy M. P.)，ウィリアム・オブライエン下院議員（William O'Brien M. P.）T. ハリントン下院議員（T. Harrington M. P.)，そしてアイルランド民族の社会的発展に心がけている社会的地位の高い他の方々にすでに同意されている。会議場は会議当日の午後 2 時にターリスのコマーシャルホテルにて決定される。

6．GAA 設立会議

本項では，Marcus de Burca の *Michael Cusack and the GAA* [23] をもとに GAA の設立会議について述べる。

《会議のようす》

1884 年の 11 月 1 日，土曜の午後三時にターリスのヘイズィズホテル（Hayes's Hotel）のビリヤードルームで会議は開かれた。そこにはたった七人だけのメンバーが集まった。会議に出席する約束をしたが出席できない人もいた。全員が席につき，キューザックが議長のダヴィンを呼んだ。それからキューザックは会議の招集の回状を読んだ。[24]

次にダヴィンがスピーチを行った。彼はアイルランド人が多くの古き良きアイルランドのゲームがこの国で死に絶えていくことが放置されていること，そしてそれらの娯楽を復活させるためにルールを起草しなければならないこと，貧しい人々のために競技会を開く組織が必要なことを主張した。[25]

キューザックはその後，長いスピーチを行った。それはアイルランドのスポーツを報道しない新聞への批難だった。そしてキューザックの元へ届いた 60 通の支持のメッセージを読み上げた。その手紙には海外からのものも含まれた。そしてその中でも特に土地同盟の指導者マイケル・ダヴィットからの手紙が，出席者の注目を集めた。次にジョン・マッケイ（John McKay）がスピーチを行った。3 人のスピーチが終わった後，この組織の会長にダヴィンがふさわしい

というキューザックの提案に，最初ジョン・ワイズ・パワー（John Wyse Power）が賛成し，全員が同意した。また，この協会の幹事には，キューザック，マッケイ，パワーが就くことになった。そして協会の目的を確認し合い，その目的がそのままこの新しい協会の名前，国民的娯楽の保護と養成のためのゲーリックアスレチック協会（Gaelic Athletic Association for the Preservation and Cultivation of National Pastimes）となった。[26] ここでいう国民的娯楽に関して，キューザックは「重量投げ」，「跳躍競技」，「ハーリング」，「アイルランドフットボール」，「レスリング」，「ボーリング」を国民的娯楽としてリストアップしている。しかし，「レスリング」はキューザックがひいきしていたにもかかわらず，GAA の設立後すぐにそのゲームは禁止された。また，「ボーリング（現在でもコークでボールズと呼ばれプレーされている）」は，GAA によって促進されることはなかった。[27]

最後にクローク大司教，チャールズ・スチュワート・パーネル，マイケル・ダヴィットにパトロンとなるように要請することを決め，会議は散会となった。多くの点で不安定で見込みのないまま新しい組織はスタートした。次回以降の会議の日や会合場所さえも決めずに別れた。[28]

なぜ出席者がこんなに少なかったのだろうか。警察関係者がこのホテルの近くにいた。しかし，彼らの関心はこの会議の内容ではなく，ブラッケンとパワーの二人のフィーニアンであった。つまり警察関係者は，キューザックらの運動が危険な運動だという認識は持っていなかった。キューザックはナショナルリーグの役人のダン・ヒッション（Dan Hishon）の助力により，ナショナルリーグ会員の郵送先名簿を手に入れ，招待状を配っていた。そういったキューザックの努力にも関わらず，出席者は少なかったので，キューザックはこの組織を成功させるために，この会議により支持の約束を多く得たことを誇張して報道した。[29]

20 年後キューザックはこのホテルでの出来事を「慌しい会議」と表現した。この会議は単に，会議が招集されたから会議を行ったにすぎないものだった。1911 年にデヴリン（P. J. Devlin）はそれが「ただの予備的な考え方のやりとり」であったことを説明している。[30]

《出席者について》[31]

GAA が設立されたとされる 1884 年 11 月 1 日の Hayes' s Hotel には七人の設立メンバーがいた。そのメンバーは，マイケル・キューザック，モーリス・ダヴィン，キャロン（Callan）のオライアン（P. J. O' Ryan），コークのジョン・マッケイ，テンプリモア(Templemore)の J. K. ブラッケン（James K. Bracken），ナース(Naas)のジョン・ワイズ・パワー，テンプリモアの地区監査人のマッカシー（Thomas McCarthy ）だった。彼らは創設初期 7 人と呼ばれている。しかしそのうちの二人オライアンとマッカシーはこの設立会議に好奇心だけでやってきた，中立な立場のいわば観衆のようなものだった。現に彼らは二度と協会の活動に参加することはない。オライアンについては単に健康を害して協会の活動に参加できなくなったという説[32]もある。マイケル・キューザックについては前述したために省略する。

キューザックの隣には，GAA の共同設立者であるモーリス・ダヴィンがいた。彼はこの運動が始められてから，この組織の，その初期と成長期に重要な役割を担った人物である。ダヴィンは素晴らしいハーリングの選手で，フットボーラーだった。彼が競技会に出場したとき，彼はハンマー投げと重量投げで世界記録を打ち立てた。しかし，彼はこれらの栄誉と比較できないほどの名声を，彼の誠実さと公正さによって獲得していた。GAA が設立されたとき，彼は 40 代前半だったが，すでに「アイルランドの偉大な男（the Grand Old Man of Irish）」として崇められていた。大多数のアイルランド人のアスリートは彼をとても尊敬していた。

ジョン・ワイズ・パワーはダブリンに住んでいた。彼はレンスターリーダー紙（*Leinster leader*）の編集者だった。そして彼はIRBのメンバーだった。彼の政治的な信念は公共の場を行進したりするという種類のものではなかった。彼はこの協会の幹事の地位を約束された。そして後に数年間ダブリン中央評議会（Dublin County Board）の議長を務めた。彼は熱心なGAAのメンバーで長い間組織には残ったが，彼にはGAAでの成功のチャンスはなかった。彼は競技会で何年間もGAAの公式ハンディキャッパー(handicapper)を務めた。

ジョン・マッケイはベルファスト出身でコークイグザミナー紙（*Cork Examiner*）の新聞記者だった。彼は競技会に非常に興味を持っていた。そして彼は後にGAAの幹事になる。彼はコークイグザミナーをやめるとき，幹事も辞職した。しかし彼はその次のロンドン，ダブリン，ベルファストでのジャーナリスト生活の間，可能な限りの援助をGAAに対して行った。

J. K. ブラッケンはテンプリモア出身の土建業者でIRBのメンバーだった。彼はアイルランドの愛国者記念館の建築を委託された。彼はGAAの代理会長の一人で，後にその組織の中で起こった論争に巻き込まれ，そして1887年の「大変動」で彼はGAAを追われる。

テンプリモアからやってきた地区監査人トーマス・マッカシーは，ケリー出身で，ティペラリーのアビースクール(the Abbey School)からティペラリーグラマースクールで学んだ。彼はそこからトリニティカレッジに進み，そしてダブリンのラグビー場でキューザックに初めて出会った。彼もまたキューザック・アカデミーで，若いころ警察官試験に合格するために，キューザックアカデミーで教育を受けた。

七人の設立メンバーの中で，もっともはっきりしないのが，オライアンである。彼はキャロンとターリスで若い弁護士として活動していた。GAAが設立された後，GAAによって行われた初期のイベントを組織することの手助けをした。彼は論争時に時折穏やかな助言を手紙で申し出たことを除いては，協会の初期の活動に参加することはなかった。

《GAAのパトロン》

設立時のGAAを考える上で3人のパトロンについて整理しておく必要がある。キューザックは1884年の夏，世間に影響力があり，高い尊敬を集め，パトロンの役目を進んで引き受けてくれそうな人を探していた。そして，パトロンとなったパーネル，ダヴィット，クローク大司教はGAAのメンバー獲得に大きな影響を与えたし，彼らの存在がGAAの活動の方向性へ与えた影響もはかりしれないと考えることができる。

a .チャールズ・スチュワート・パーネル（1846-91）

父親は英国系の裕福な地主であったが，母親はアメリカ人で，父親が英国と戦った経験があるだけに，英国嫌いであった。パーネル素行不良で英国のいくつかの学校で退学させられ，ケンブリッジ大学も酔っ払って放校処分になった。67年のIRBの蜂起後に処刑された3人の「マンチェスターの殉教者」事件に刺激をうけて英国嫌いになり，75年にアイルランド選出の英国下院議員となってアイルランドの自治問題で活躍し，マイケル・ダヴィットに要請されて「土地同盟」の会長に就任した。

パーネルは11月1日のターリスでの会議の中に少なくとも3人のフィーニアン(ブラッケン，パワー，そして近辺にいたとされるマロニー(Maloney)）がいたことを知っていた。彼はパトロンとなることを喜んで受けたが，その要請の返答からは積極的に活動に参加しようという意思は読み取れない。しかし，キューザックは彼の参加が非常に大きなものと考えており，この新しい組織を設立し運営していくためにパーネルからのどのような要求にも応えようとした。

b. マイケル・ダヴィット（1846-1906）

メイヨー州に生まれたが，貧乏な小作人の一家は大飢饉後に英国に移住した。11歳のときから英国の木綿工場に働きにでて，機械に右腕を挟まれて切断した。65年にIRBに加入し，70年に殺人容疑教唆で15年の刑をうけて服役し，77年に仮釈放されて，渡米した。そこでフィーニアンズのデヴォイと会い，IRBと土地問題の活動家を結びつけることを学び，79年に故郷に帰国してアイルランド議会党のパーネルを説得して三者の連携による「新しい出発」を成し遂げた。

ダヴィットとキューザックは心からの信頼関係を築いていたとされる。1884年8月，ダブリンのカトリッククラブで，二人はそれぞれの計画について議論しあった。そして，彼はキューザックの考えに共鳴し，独立したアイルランドのアスレチック協会を設立するとき，手助けすることを約束した。キューザックのダヴィンへの手紙の中に「我々は1886年には必ず計画的大集会を開くことができるだろう」と書かれていた。それはダヴィットが最初にキューザックに話した，彼の理想であり，キューザックはいつも彼のその考えを賞賛していた。

c. クローク大司教

1884年，クローク大司教は60歳になっていた。彼は「人間の中の人間」と呼ばれたカトリックの父と，貴族と姻戚関係のあるプロテスタントの母の間に生まれた。ローマとパリで聖職について学んだ後，クロークは20年間ニュージーランドのオークランドで助任司祭を務めた。故郷のクロイネ（Croyne）で学寮の寮長や教区の司祭を務めた。1875年にキャシェル（Cashel）の司教に任命される。彼は当時のアイルランドの中で，最も広い見地をもち，率直で活発な，そして雄弁で愛国心ある高位聖職者だった。

クロークがGAAのパトロンとなることに同意したのは，当然のことだったと考えられている。彼は自分の教区を巡回中，道端で若者がだらだらしたり，手をポケットにいれて元気がない様子を見てとても悲しんでいた。また，伝統スポーツが盛んだと言われていたマンスターでもアイルランドの他の場所と同様に，対教区間のハーリングやフットボールのルールは違っていた。このようなことから，クロークはGAAの必要性を感じていたと考えられる。彼は自分が健康なうちはパトロンとしての役割を果たすことを約束し，それは20年近く続いた。[33]

《パトロンからの手紙》

11月1日からおよそ6週間後の，1884年12月11日にキューザックはパーネル，ダヴィット，クロークに手紙を書いた。それは会議で彼らにパトロンとなってほしい旨を伝えるもので，正式に彼らの同意を得るためのものだった。3人ともその返事を10日以内に返した。そしてそれら受諾の手紙の写しをキューザックはダブリンのナショナリストの組織とスポーツ組織に渡した。また，フリーマンズジャーナル紙は12月24日に，ユナイテッドアイルランド紙とアイリッシュマン紙は12月27日に三つの手紙全てを掲載した。[34]

パーネルからの手紙の内容は，温かい調子を保ちながらその内容は希薄なものだった。GAAの目的に賛成することと，自分がパトロンになることに名誉を感じる表現だった。彼はこの新しい運動が成功するために手助けすることを約束した。それは，キューザックが望んでいたものであったが，他の二人のものとは違いそれ以上のことは書かれていなかった。[35]

ダヴィットからの返事は新しい協会を熱烈に支持し，GAAの目的をより進めることができるように活動したい意思が表現されていた。[36]

クロークからの手紙は，GAAのメンバーに大きな影響を与えた。その手紙はGAAの憲章的なものとなり，1世紀にわたりルールブックに掲載された。[37]

―我々はその（英国の）流行，発音，音楽と踊り，

そして多様な生活スタイル，スポーツまたは娯楽を全て取り入れている。それは，いかにも我々の壮大な国民的なスポーツにとって屈辱であり，この歴史ある国の全ての国民にとって恥をかかせることである。

アイルランドルールによって行うボール遊び，ハーリング，フットボール，キャスティング，様々な跳び回る遊び，レスリング（中略）大人にも子供にも愛されるゲームや遊びなどが今はもはや消えかかっている。それだけではなく，多数の地域で全く忘れられたり，または知らなかったりしている。

その代わり我々は何を得たのだろうか？ローンテニス，ポロ，クロッケー，クリケットなどのような外国で生まれた素晴らしいフィールドスポーツはそれなりに優秀で健康的なスポーツではあるが，この地の独特さはなくやはり外国のものだ。

この数年間で我々が伝承してきたスポーツを強く非難したり，恥じるかのようにわが国の特色を目立たなくさせたりして，英国のものや英国風の広幅織物を身につけたり，英国風のジャガイモつぶし器の慣習まで受けいれたり，その柔弱な愚行を行ってきた。このままあとしばらく歩んでいくなら，直ちに公的に国民性を捨てて，ユニオンジャックを目にするたびに喜びを表したり，「イングランドのブラッディレッド（England' s bloody red）」を大喜びで「グリーン（the green）」の上に描けばいい。

若者たちは，この手紙が載せられた新聞の切り抜きをポケットにいれ持ち歩いた。

7．まとめにかえて

ハーリングは GAA が設立される以前から各地で行なわれていた。しかし，様々な理由により衰退し，19 世紀の後半にはほとんど行なわれなくなっていた。当時，人気を博していたスポーツは陸上競技大会だったが，アイルランド人の多くはアマチュア規定のために参加が認められなかった。GAA の設立者キューザックは，伝統スポーツの衰退とアイルランドで開催される大会にアイルランド人が参加できないことに不満をもっており，この二つの課題を解決するための組織として GAA の設立を決意する。そして，キューザックはこの組織を成功させるために，政治家やナショナリスト，カトリック教会の司教にパトロン就任の要請を行なった。キューザックの設立当初の思いは，GAA を対英国スポーツのための組織にするつもりはなかったが，対英国を公的に表明している 3 人をパトロンとしたため，組織は「対英国」の傾向をみせはじめる。つまり，英国の反対側にあったのが「アイルランド」であり，これら GAA スポーツに「アイリッシュネス」が結びついていく。GAA スポーツは元々その地に存在したものであり，「アイリッシュネス」との融合は自然なものだった。それ故，現在も「アイリッシュネス」＝GAA スポーツの図式が成立しているのである。このことを日本に引き寄せて考えると，日本の文化と融合したスポーツライフを国民スポーツとして展開していくためのヒントになろう。外国産のスポーツ一辺倒になるのではなく，これまで存在した日本独自の身体文化である相撲や綱引き，流鏑馬，蹴鞠，盆踊り，祭り等の一部内容も生涯スポーツの内容と加味して行くことが考えられてよいのではないだろうか。

引用・参考文献一覧

[1] Pudraig Puirseal(1982) *The GAA, In Its Time*, Ward River Press

[2] Seamus J King(1996) *A History of Hurling*, Gill and Macmillan

[3] Marcus de Burca(2000) *The GAA, A History*, Gill and Macmillan

[4] Marcus de Burca(1989) *Michael Cusack and the GAA*, Anvil Books

[5] Seamus O Riain (1992) *Maurice Davin(1842-1927)*, Geography

[6] Jim Cronin (2005) *Making Connections, A Cork GAA Miscellany*

[7] Brendan Fullam(2004) *The Throw-IN, The GAA and The Men Who Made It*, Wolfhound Press

[8] W. F. Mandle(1985) 'The Gaelic Athletic Association and Popular Culture, 1884-1924', *Irish Culture And Nationalism, 1750-1950*, Macmillan Press

[9] W. F. Mandle(1979) 'Sports as Politics: the Gaelic Athletic Association 1884-1916' *Sport in history : the making of modern sporting history*, University of Queensland Press pp.99-123

[10] Paul Rouse (1993) 'The Political of Culture and Sport in Ireland: A History of the GAA Ban on Foreign Games 1884-1971. Part One: 1884-1921' The International Journal of The History of Sports Vol.10, No.3 , pp.333-360

[11] 石井昌幸(1996)「黎明期のゲール運動競技協会に関する覚え書き」スポーツ史研究 第9号, pp.49-57

[12] 海老島均(2004)「GAAクラブ史を通してみた民族アイデンティティの形成過程」エール第24号, pp.65-85

[13] 大沼義彦(2003)「アイルランドにおけるスポーツの背景—エステニシティとナショナル・アイデンティティとの間—」北海道大学大学院教育学研究科紀要第89号 pp.89-103

[14] 坂なつこ(2005)「アイルランドにおけるスポーツ—ゲーリック・アスレティック・アソシエーションを例に（スポーツのグローバリゼーションとローカリゼーション再論)」一橋大学スポーツ研究 Vol.24 pp. 29-38

[15] T. F. O'Sullivan(1916) *Story of the GAA*, Dublin

[16] King, *The GAA, A History*, p.46

[17] 石井, p.55

[18] John Sugden and Alan Bairner(1993) 'National identity, community relations and the sporting life in Northern Ireland' ,*The Changing Politics of Sports*, Manchester University Press, pp. 171-206

[19] Padraig Puirseal, 前掲書 pp.19-25

[20] Padraig Puirseal, 前掲書 pp.13-28

[21] Marcus de Burca , THE GAA A History, pp.5-14

[22] Marcus de Burca, Michael Cusack and the GAA, pp.90-98

[23] Marcus de Burca, Michael Cusack and the GAA, pp.100-112

[24] Padraig Puirseal, 前掲書 p.44

[25] Marcus de Burca , *THE GAA A History*, pp.5-14

[26] Padraig Puirseal, 前掲書 p.44 ,45

[27] Marcus de Burca, *Michael Cusack and the GAA*, p.98

[28] Marcus de Burca , THE GAA A History, p.14

[29] Marcus de Burca, Michael Cusack and the GAA, p.105, 106

[30] 同上書 p.103

[31] 同上書 p.104,105

[32] Marcus de Burca, Michael Cusack and the GAA, p.100

[33] Marcus de Burca , THE GAA A History, p.13

[34] Marcus de Burca, Michael Cusack and the GAA, p.108

[35] Padraig Puirseal, 前掲書 p.49

[36] 同上書 p.51

[37] 同上書 p.49, 50

附記

本稿は，榎本雅之が金沢大学大学院教育学研究科在学中の2004～2005年にかけて姉妹校提携を結んでいるアイルランド・ダブリン市大学に留学するなかで収集した資料をもとにまとめた，平成18年度同修士論文『1887年のGAA（Gaelic Athletic Association）主催陸上競技大会』に続く一連のアイルランドスポーツ研究の一つである。スポーツの近代化は一般にグローバル化するに伴って，そのナショナルなあるいは土着のアイデンティティや文化性を喪失していくことが多いが，アイルランドのスポーツは，近代化を目指しながらもきわめて強い個性，榎本のいう「アイリッシュネス」を主張し続けている。こうしたあり方は，新しい時代のスポーツのあり方，とりわけ国民スポーツ的な生涯スポーツを考える時に，きわめて重要であろう。スポーツが文化である以上，その個性が言語や文学など様々な分野，例えばアイルランドのきわめて個性的な酒にも表現されるように，スポーツにも現れて当然と考えるからである。なお本稿はかつての指導教員として大久保が若干のアドバイスや修正を加えたが，功績は全面的に榎本雅之にある。大久保が著者筆頭にあるのは学部紀要の規定に基づくためである。

（大久保英哲記）